©日本カムリ学会
Bwletin Astudiaethau Cymreig Siapan 2(2):3-5

R.S.トマスとウェールズ語――ふたつの言葉の間で

永田喜文

要旨 abstract
R.S. Thomas, the Welsh writer (and priest), composed all of his poetry in English, his mother tongue. He reserved Welsh language for prose, lectures and services in church. In his youth, he was passionate about learning Welsh because he was influenced by the Welsh leaders who considered the Welsh language as an essential element of the Welsh people's identity. And his anger toward the English who tried to decay Welsh was deep. However in his later years, he could see the good and bad points in the Welsh language; the ability to express both negation and affirmation in a Welsh word like 'dim' was superior to English but it also lacked the vocabulary to depict the modern technological world. As a result he claimed Wales should be a bilingual country. So he swayed between two languages and he felt he possessed two identities because of it; language makes one's identity. A certain tension existed between the two combating languages, his two identities, and this tension was reflected within his poetry.

1.R.S.トマスについて（アングロ・ウェルッシュ詩人）

R.S.トマス（Ronald Stuart Thomas）(1913-2000)はウェールズ聖公会(英国国教会；Church in Wales)の牧師であり、英語で詩を書くアングロ・ウェルッシュ詩人であった。トマスは第1言語を英語とし、30歳を過ぎてからウェールズ語を学んだこともあり、英語で詩を書き、ウェールズ語は散文の執筆、講演、及び、教会での説教に使用した。

トマスは非常にウェールズへの愛国心が強く、ウェールズ語を愛国心の象徴とも考えていた。故にウェールズ語習得への願望は強く、晩年には流暢にウェールズ語を喋るまでに上達した。それにもかかわらず、ウェールズ語で書いた詩は'Y Gwladwr'のみである。この理由をトマスは、「私にとって、詩人とは最も敏感かつ独特な方法で言葉を使う人間である。このためには、詩人は母国語で書かねばならない･･･ 。」[1] と述べ、さらに「しかし、もし私たちが英語をその媒体として選ぶならば、本質的にウェールズ人のままでいるために、ひたむきな心を、意志の強さを持つことができるだろうか？」[2] と、英語でウェールズの民族性を保ち、かつ、表現しうるか、と自らに問う。最終的にトマスは「アイルランドは持ち続けてきた。スコットランドはそれを求め努力している。私たちも同じことをすべきである。」[2] と結論付ける。

こうしてトマスは、生涯、自国の言葉で書きたいと思う気持ちと、書けないという事実の両方の間に立ち、このフラストレーションがトマスの詩に内在する緊張感を生み出すことになる。

©日本カムリ学会
Bwletin Astudiaethau Cymreig Siapan 2(2):3-5

2. 理想のウェールズ

トマスの詩は、詩集 *H'm*（1972）を境に前期と後期に大別される。前期では特にトマスは、理想のウェールズ像を掲げながら、ウェールズ性を殊更強調する。この理想像は他ケルト国の作家や Toc H、ウェールズ指導者サイナルド・ルイスやグエナルストらからの影響と、アイルランドのゴールウェイを旅した経験などから形作られた。これは、総括すれば、ウェールズ語という独自の言葉を持つケルト的でキリスト教化された平和なウェールズの小さな共同社会である。そこでは産業革命により近代化されたウェールズとは異なり、ケルト的な農耕生活が営まれる。神は自然を通じてウェールズの民に語らい、そして、民は「古い言葉」のウェールズ語で神に祈りを捧げる。トマスはそこに「帰る」ために、30 歳にして本気でウェールズ語を学ぼうと決心する。

したがって前期において、ウェールズ語は愛国心の象徴でもあり、理想のウェールズ社会への扉をあける鍵の役目を果たす「古い言葉」であった。そしてこの理想社会は、ウェールズ語のみが使用されるモノリンガル（単一言語）社会だった。

3.トマスの詩とウェールズ語

トマスは、ウェールズ語修得以前でさえ、ウェールズ語で編まれた伝説や作品、歴史への知識が膨大だった。それらの引用を自らの詩に鏤め [3]、また、ウェールズ人農夫を詩に登場させることで [4]、英詩でありながら、英詩とは違ったウェールズの独自性やウェールズらしさ(Welshness)をトマスは強調する。'Border Blues'などにおけるウェールズ詩や民謡の引用は、ウェールズらしさを強調するのに十分すぎるほどだ。トマスはこれらの詩を通じて、ウェールズ人読者にウェールズ人魂を喚起させようとする。

同時にトマスは、自国の言葉を奪ったイングランドと、ウェールズへの止められぬ英語の流入に対し、憤激する。'It hurts him to think', 'Reservoirs'ではイングランド人に怒りを直接ぶつけ、また、'The Lost'ではウェールズ語の現状を克明に描く。そして'Welsh'では深刻なウェールズ語衰退の事実と、ウェールズ語へのトマスの強い思いが並列され、そこから独自の緊張感が生まれている。

4. ウェールズ語の優位性と劣位性

しかしながらこれらの愛国的な詩は、現代社会における神の探求が始まる後期（*H'm* 以降）には、影を潜める。その理由としてトマスは、ウェールズらしさを強調することに疲れたことを挙げている [5]。だが 67 年に居を移したスリン半島の西端にあるアバーダロンは、ウェールズらしさが根強く残る小さな漁村である。ここに、かつて思い描いた理想のウェールズ社会に重ね合わせ、トマスが心に安堵を覚えたことも影を潜めた要因だろう。これを期にトマスは詩からウェールズらしさの強調を排除し、その一方で積極的に散文や講演でウェールズ語を使用するようになる。ウェールズ語を積極的に使用することで、ウェールズ人の民族魂に直接語りかけようとしたのだ。

しかしウェールズ語を使えば使うほど、その長所と短所が顕著になる。即ち、dim（「無」）や neb（「誰も～ない」）を「存在する」と解釈できるウェールズ

語の優位性を説きながら、その一方で、ウェールズ語の外国語からの借用語の少なさを挙げ、テクノロジーの発達した現代社会を描くにはウェールズ語は不適当であると結論付ける。

5. 結論に代えて――ふたつの言葉の間で

トマスは、*Wales or Cymru* と題した散文の冒頭で、英語かウェールズ語かという二者択一ではなく、その中間、すなわち、英語とウェールズ語のバイリンガルを選ぶことが、現代ウェールズでウェールズ語を生き延びさせるひとつの方法だと述べる [6]。しかしふたつの言葉を選ぶことは、ふたつのアイデンティティを持つことでもある [7]。そのふたつのアイデンティティの間で揺れ動き続ける様をトマスは晩年に発表した'Reflections'に、"a shifting/ identity"と詠んだ。このふたつの対極的なものの間で揺れ動くことは、トマスの内に緊張感を醸し、育ててゆく。その緊張感からトマスの詩は生まれたとも言える。

註

1. R.S. Thomas, "If I had the Language …", *Selected Prose*, p. 140
2. R.S. Thomas, "Some Contemporary Scottish Writing", *Selected Prose*, p. 33
3. Cf., 'Those Others', 'The Rising of Owain Glyndwr', 'Hyddgen', 'The Ancients of World', 'Saunders Lewis', 'A Lecturer', etc …
4. 'A Peasant'や'The Dark Well'など一連の Iago Prytherch 詩はこれにあたる。
5. cf., R.S. Thomas, 'The Making of a Poem', *Selected Prose*, p. 84
6. R.S. Thomas, *Wales or Cymru?*, p.1
7. R.S. Thomas, 'Reviews of Bury My Heart at Wounded Knee', *Selected Prose*, p. 117